

5・15 平和行進 沖縄地元紙連載記事紹介 -newspaper clipping-

*CONTENTS*

- 沖縄タイムス「たゆまぬ一歩 5・15 平和行進（5回連載）」  
2020年5月11日（月）～15日（金）
- 琉球新報「歩みつなぐ 5・15 平和行進（4回連載）」  
2020年5月13日（水）～16日（日）
- 沖縄タイムス、琉球新報2020年5月15日社説
- 琉球新報515 アピール紹介記事
- 復帰48年 5・15 平和アピール（沖縄平和運動センター）

2020.05.16 沖縄平和運動センター事務局

# 絶えぬ基地被害に怒り

## 復帰の内実 県内歩き問う

### たゆまぬ「歩」

#### 5・15 平和行進



「祖国復帰は実現したが、復帰闘争の目標はいまだ達成されておらず今後の闘いとして残されている」。沖縄の日本復帰から5年を迎える1977年5月15日、県祖国復帰協議会(復帰協)が解散。総会での解散宣言に

「沖縄闘争を再構築しよう」と行進する参加者=1978年5月15日、那覇市・国際通り

▷1

こう記した。

反戦平和などの大衆運動を担う団体として、労働組合や政党で構成する「護憲反安保・平和とくらしを守る県民会議」(護憲反安保)が同年10月に発足。新たな運動をどう構築するか。翌年の5・15に向けた取り組みの議論が続いた。

当時、護憲反安保の幹事だった渡久地政弘さん(81)は、構成団体の県労働組合協議会の幹事で反戦・反基地闘争の責任者だった。基地被害の象徴だった「県道104号越え実弾砲撃演習」があるたびに抗議行動に参加。当時の金武村と恩納村をつなぐ生活道路が封鎖され、着弾時の爆音被害も相次いだ。ある日の抗議行動で、住民の男性が手を震わせ悔しそうな表情でつぶやいた。「復帰したのに、米軍はまだ艦砲射撃をするのか」。沖縄戦を想起した男性の言葉に、渡久地さんははっとした。

復帰時に県民が願った基地の全面返還はおろか、復帰から5年たっても全国の米軍基地の5割以上が存在し、基地から派生する事件事故など被害が絶えない。「復帰の内実を問う沖縄

闘争の再構築が必要だ」。渡久地さんは復帰前、沖縄が日本から切り捨てられた4月28日に合わせて実施した復帰行進のように、地域をくまなく歩き訴える運動が必要だと感じた。

護憲反安保の幹事会で「現地での抗議行動の強化も大切だが、運動の裾野を広げるには県内全域に実情を伝えるため、歩こう」と提案。翌78年からの「5・15平和行進」実施が決まった。

(社会部・伊集電太郎)

沖縄が日本に復帰して15日で48年。復帰の内実を問い直す運動として1978年に始まった「5・15平和行進」は今年、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため初めて中止となった。取り組みを振り返り、沖縄の現状を見つめる。

21面に続く

# 痛み耐え訴えた3日間

## たゆまぬ一歩

### 5・15平和行進

#### 1面から続く

1978年5月13日。名護市役所に「基地撤去」などと書かれた赤い鉢巻きをした約150人が集結した。関係者の激励を受け、東西2コースで3日間、那覇までの「5

#### 参加者の思い

東コースの副団長を務めた大城卓志さん(72)＝西原町＝は3日間歩き通した。2日目には県内で豪雨が降り、当時の具志川市内では川が氾濫。国道が濁流にのまれて先導車両も一時通れず、参加者は橋の欄干を伝って前に進

15平和行進」が始まった。米軍基地の前では「演習即時中止」と氣勢を上げ、歩を進ら基地被害の実情など聞いた。

#### 念願の草の根運動に

最終日。行進団が県庁前広場の「5・15平和とくらしを守る県民大集会」に到着すると、出迎えた家族や1、2日目の行進参加者と抱き合い涙する人も。労組の仲間から「よく頑張った」と肩をたたかれてねぎらいを受けた大城さんは「これで来年になげられる」と胸をなで下ろした。

回を重ねるごとに、行進参加者へ車からクラクションを鳴らしての激励や、住民が浴道で軽食を配るなど運動が浸透していった。行進を提案した「護憲反安保」幹事の渡久地政弘さん(81)は、復帰から10年となる82年の行進最終日に開かれた県民大会は、主催者発表で復帰後最大規模の集会参加となる約2万5千人が集まったと話し、「当初目指した草の根運動になっただ」と実感する。

昨年まで刻んだ行進回数42回。毎年参加している仲村勝彦さん(78)＝宜野座村＝は「運動が続いているのは、裏を返せば沖縄の状況が変わっていないということだ」と怒りを込める。

78年当時、全国の米軍専用施設面積の約53%が沖縄に存在したが、現在は約70%と割合は増加。県内の主要選挙や昨年の県民投票でも辺野古新基地建設に必要な沖合埋め立てに7割超が反対した民意も無視し、政府は新基地建設を強行する。米軍キャンプ・シユワブゲート前の抗議行動に連日足を運ぶ仲村さんは「復帰の時に県民が求めた基地なき平和な沖縄が実現するまで、行動を絶やしてはいけなし」と訴えた。

(社会部・伊集電太郎)

# 基地問題 国内外に発信

## たゆまぬ一歩

5・15平和行進

1977年に「護憲反安保  
県民会議」幹事の渡久地政弘  
さん(81)が「5・15平和行進」  
を提案するきっかけとなった  
県道104号越え実弾砲撃演  
習は、当時の象徴的な基地問  
題だった。

同演習は復帰前からあり、  
復帰後は73年から始まった。  
住宅地の上空を通過して米軍  
キャンプ・ハンセン内の金武  
岳やブート岳、山の谷間など  
に撃ち込まれ、当時の金武村  
と恩納村の生活道路だった県

▷2

道が封鎖された。爆音による  
小中学校の授業中断や砲弾破  
片の落下、家屋のひび割れな  
どの被害も相次いだ。

直後から労働組合や住民ら  
が県道に座り込み抗議。当時、  
北部地区労働組合協議会書記  
だった仲村善幸さん(73)「名  
護市」も加わっていた。「抗  
議で演習は止まらない。なら  
ば、中に入って阻止だ」。着  
弾地の山中に多い時は200  
人規模で演習前に侵入。タイ  
ヤなど焼いてのろしを上げ、  
そのたびに演習を中止させ  
た。一連の運動は後に、集落  
名から「喜瀬武原闘争」と呼  
ばれるようになった。

### 行進参加者

## 活動発展へ「議論の時」



その後フェンスが設置さ  
れ、基地内侵入の刑事特別法  
違反による逮捕の懸念から阻  
止行動は労組の専従組合員が

中心に。76年9月、仲村さん  
は行動後の下山途中の休憩時  
に後方から来た機動隊に取り  
押さえられ、この日4人が逮  
捕された。

初回の行進の78年、名護で  
はキャンプ・シユワブから海  
岸への砲弾落下やハリアアの  
離着陸訓練による爆音被害な  
ども起きていた。仲村さんは  
初回から行進に参加する。「平  
和運動の中でも最も重要な運  
動の一つ。全国からの参加者  
も沖縄の基地の現状を歩いて  
体感し、基地のない沖縄を目  
指すとのメッセージを国内外  
に発信する意義がある」と継  
続の必要性を語る。

米海兵隊の県道104号越え実弾砲  
撃演習は阻止団が着弾地点付近を占  
拠し、中止に追い込んだ。1975  
年2月18日

一方、運動の中心となる労  
組の弱体化や時代の変化もあ  
り全体的な運動の継続に危機  
感を持つ。運動の発展に向け、  
辺野古新基地建設に反対する  
運動のように「思想・信条を  
超えた幅広い枠の平和運動と  
してどう継続していくかを議  
論する時期ではないか」と語  
る。

県道104号越え実弾砲撃  
演習は97年に本土移転となっ  
た。「長年の運動の成果だ」  
と強調する渡久地さんは今後  
の運動として、現在の大衆運  
動の中心である辺野古新基地  
建設の抗議現場に行進参加者  
を集中的に投入した阻止行動  
や、全国世論の喚起のため本  
土でも5・15平和行進を実施  
することを提案した。  
(社会部・伊集童太郎)

# 「人間の鎖」で意思表示

## 「たゆまぬ」歩

### 5・15平和行進

▷3

「午後1時58分、人間の鎖で完全に包囲しました」。つないだ手を上下させ、歓声とともにウエーブが起きる。終了の合図があると、参加者から大きな拍手が広がった。

1995年5月14日、雨の中、米軍普天間飛行場の周囲に1万7千人(主催者発表)が集まった。「5・15平和行進」に合わせ、別の実行委員会主催で実施した包囲行動だ。

各地から出発した行進団や地域住民らが手をつなぎ、基地を取り囲む。参加を続けてきた連合沖縄元会長の大城紀夫さん(66)は「労働組合の闘争型ではなく、住民も中心と

## 基地包囲



なつた自主参加型の運動だった」と当時を振り返る。

包囲行動自体は、5・15とは別で87年の嘉手納基地が始まりだ。反戦運動が停滞する中、もう1度訴える場を作ろうと県労働組合協議会(県労

## 住民参加型の運動に

隣の人と手をつなぎ米軍普天間飛行場を包囲する参加者。1995年5月14日、宜野湾市野嵩・回飛行場第3ゲート

協)が話し合いを重ねて実現した。89年には宜野湾市で基地問題の大規模なシンポジウム(同市職労主催)が開かれていた。基地を抱える首長が参加。「民主主義を守るのは市民一人一人の決意と行動だ」と呼び掛けた。90年の嘉手納包囲後の総括では「普天間など他地域での行動に波及できないか」との意見が出た。

大城さんは「この頃から普天間飛行場の返還に向けた包囲行動への機運が高まっていた」とみる。

95年の包囲後、普天間では5・15に合わせて98年、2004年、05年、10年と計5回実施。地域住民として参加してきた呉屋初子さん(69)「宜野湾市」は「包囲行動は基地を撤去すべきだ」という意思表示

示の場。いつもかき立てられる思いがあった」と語る。10年の包囲では雨の中、知人と市役所近くに立ち、つなごうた手を空に掲げ「普天間飛行場の返還を絶対に諦めてはいけない」と知人と語り合ったという。

昼夜を問わない訓練で、呉屋さんは騒音被害に苦しめられ続けている。「沖縄は何のために復帰したのか、復帰とは何か。もう1度根底から考え直さなければいけない」と訴える。

一方、嘉手納基地の包囲行動は計4回。5・15に合わせて初の包囲となる07年に参加した北谷町の今郁義さん(73)は「包囲行動は極東最大の基地が日常にあるものではなく、危険であり続けることを認識する場だった。『静かな夜を返せ』という住民の思いが実現してほしい」と力を込めた。(社会部・光墨祥吾)

# 自衛隊配備に抗議示す

## たゆまぬ「歩」

5・15平和行進

2016年5月15日、石垣島で初めて平和行進に参加した石垣市の花谷史郎さん(37)は、東京で学生時代に聞いた同級生の言葉を思い返しながら歩を進めた。

「沖縄の人は、みんな泣き寝入り状態。今も明らかに差別はある」。県人会で親しくなった本島中部出身の女性が発した言葉。復帰後も米軍の事件・事故が相次ぐ沖縄の置かれた状況への憤りだった。

高校卒業後の01年4月、島を離れて東京農業大学に進学。基地のない石垣島で生まれ育つ中、米軍基地を巡る問題に関心はなかった。むしろ

## 石垣からの訴え

▷4

その存在を「どこか容認していた」。

基地で働く親戚もいる。経済的な面など、沖縄の生活と切り離せない部分もあるのでは。大学3年だった03年、そんな「容認論」を口走った時、女性が「なんでそんなことが



平和行進で、自衛隊配備の造成工事が進む現場周辺を歩く参加者。2019年5月15日、石垣市平得大俣

## 無関心から「当事者」へ

言えるのと激しく怒った。

その年、米軍関係者の事件・事故が相次いでいた。5月に本島北部で米兵による女性暴行事件が発生。それまでも住居侵入や放火、飲酒運転による死亡事故なども立て続けに起きた。米側が容疑者の身柄引き渡しを拒むなど、日米地位協定の問題も何度もクローズアップされた。

「暴行を加えられたり、亡くなった。それでも基地へ逃げ込めば、沖縄は泣き寝入り。それが日常にあふれている」。見たこともないけんまくで語る女性を前に、気持ち揺さぶられ、涙があふれた。温度差。「当事者」になりきれていない自分への悔しさがあつた。

ただ、東京から島に戻り、農業を営む日常で、基地問題にほとんど関心を持てなかった。平和行進への参加は、石垣島への自衛隊配備計画が浮上

したのがきっかけ。15年11月、地元隣接する平得大俣が予定地として市に示された。

抗議行動で知り合った人々に誘われ、歩いた約10キロの道に「基地のない沖縄を」と書いた赤いはちまきを締め、シュプレヒコールのなかで初めて身を置いた。それから毎年参加するたび、無関心だった時代の自分への悔しさが浮かぶ。

島への自衛隊配備は、市民の多くが求めた住民投票で「民意」を問われることなく進む。名護市辺野古の新基地建設は、県民投票で示された反対の民意すら「無視されている」。

いつまでも、課題の先にいるのは日本政府。「すぐ解決する問題とは思わないが、沖縄を犠牲にする、人権無視の状況があると訴えたい。若い世代もつながる5・15になれば」(社会部・新垣玲央)

# 平和求めて「歩き続ける」

## 5・15行進実行委 山城さんに聞く



「5・15平和行進」を振り返る同実行委員会委員長で沖縄平和運動センターの山城博治議長＝うるま市内

### 「基地の島」強化許さぬ

沖縄が日本に復帰して15日で48年。1978年から続いた「5・15平和行進」と、行進の最終日に開かれる県民大会は今年、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため初めて中止となった。主催する同実行委員会委員長で、沖縄平和運動センターの山城博治議長は「中止は断腸の思い」と語る。行進の意義などについて聞いた。（聞き手＝社会部・伊集重太郎）

「中止の理由は、安倍政権が憲法改正を訴える中、憲法や平和、くらしを守り、基地強化・拡張を許さないと基地の島沖縄から発信する意味は大きい。平和を訴え、40年以上も続く行進は全国でも沖縄だけがええのないうるま運動だ。しかし『命どろ』を訴えてきた中で感築リスクのある運動はできない。行進の意義は、復帰への県民の期待は大きかったが、その後、基地の自由使用の密約などが分り、沖縄が『基地の島』として維持されることが分かった。軍事化が激しくな

る中、県道104号越ええ弾砲撃演習への怒りから行進は始まった。現在は各護

### 沖縄の実情知る機会に

ためまぬ「5・15平和行進」

平和行進の現在の参加者は復帰後世代が多い。

森幸寛さん（71）＝那覇市＝は昨年まで8年間、行進団の誘導係として歩いた。県民はもちろん、県外からの参加者も多く、沿道の住宅や車両から手を振る人たちもいたのが印象深い。行進は、日米地位協定の改定要求など、「民意を目に見える形で意思表示する場」として意味がある」と話す。

大田拓矢さん（29）＝那覇市＝は昨年、初参加。「県外の人にも沖縄の問題に関心を持ってくれているのはうれしかった」

### 復帰後世代



昨年、平和行進団部コースの団長として歩いた金城比呂さん（右端）＝2019年5月17日、糸満市内

た。沖縄の状況を全国に発信できる機会だ」と語る。学校で平和教育の場はあるものの、社会人になって歴史など

市辺野古への新基地建設や宮古・八重山の自衛隊配備へ反対の声を上げている。時代にに応じて発信してきた

が、コロナ禍で沖縄防衛局はまたも不意打ちで埋め立て承認の設計変更を県に申請した。県民に寄り添う政府とはとても言えない。今後の運動について。「若い世代が持つ感性で

### 「時代に合わせ継続を」

を学ぶ機会が少ないため、戦跡や基地を歩くことで知る契機にもなっている。現在も県内には多くの基地が存在し、新基地建設も進む中、運動によって平和を求め続けるべきだと考える。一方、参加者からは3日間続けての参加が厳しいなどの意見もあり、「同じやり方でいいのかわかなくて議論し、時代に合わせる形で残していかなければならない」と話した。復帰の年に生まれた金城比呂さん（74）＝宜野湾市＝は昨年、南部コースの団長を務め、戦跡などをガイドしながら初めて3日間歩き通した。県外の参加者から「観光地しか行かなかったがなかった。歩いて実情を学べた」と感想を聞いた。金城さんは「県外の人にも沖縄の実情を知り、一緒に声を上げる良い機会だ」と感じる。（社会部・伊集重太郎）

続けたい。今回の中止は今後どうすれば若者を運動に引き付けられるのかを考える機会でもあり、その契機になるべきだ。沖縄が歴史で、培われてきた抵抗の精神は、めげないこと、勝つまで諦めないこと。毎年数千人が、戦争のない時代を求めて声を上げ歩き続けることは、今の県民の思いを反映している。その思いに応え、支える運動でありたい」

# 変わらぬ基地被害訴え

元護憲反安保  
県民会議メンバー 玉城幸輝さん(82)、渡久地政弘さん(81)

# 日本復帰原点見詰め

1977年10月に結成された護憲反安保・平和とくらしを守る沖縄県民会議(護憲反安保県民会議)。初代事務局長だった玉城幸輝さん(82)「那覇市」は運動方針について頭をひねっていた。沖縄戦で亡くなった家族に思いを寄せ、復帰運動に汗を流した人々の願いを引き継ぐ。原点に立ち返るべきとの思いに行き着いた。

## 150人で最初の一步

### 歩みつなぐ

5・15 平和行進

▷1

1978年5月13日  
初開催となった5・15  
平和行進出発式(1名護)



父の幸助さん、長兄の幸雄さんを沖縄戦で失い、戦後は進学を断念した姉が軍作業員として働いた。その姿を耳詰めてきた玉城さんは「涙張らないといけない」と懸命に勉強した末、郵便局への就職を決めた。米軍による土地の接収に対する島ぐるみ闘争や米軍にあらがう瀬長亀次郎さんに影響を受け、玉城さんは全連信男闘組の活動に力を入れた。65年4月、県祖国復帰協議会(復帰協)が祖国復帰要求大行進を初開催した。本部郵便局勤務だった玉城さんは亀田康吉全連委員長から行進団受け入

れき求められ、快諾した。行進団は本部町渡久地で信宿し、翌日名護まで歩いた。初めて行進に加わった玉城さんは心が躍った。これらのものは沖縄は、沖縄を返せ、沖縄を返せ。歌声が響く。警戒する米軍が監視していた。行進団はもちろんだ。治道で応接する人も米統治下から日本への復帰を願うは一つだった。72年5月15日、沖縄は日本に復帰した。それから5年後の5月15日、復帰協は解散した。この年10月、反戦平和など大衆運動を担う団体として護憲反安保県民会議が発足し、玉城さんは

準備会から関わってきた。当時、現在の金武町と恩納村をつなぐ県道104号を越え全弾砲撃演習が暮らしを脅かす問題として県上り、住民や多くの県民が体

を張って止めようとした。「即時無条件全面返還」とはほとんど現実とは思わなかった。

護憲反安保県民会議の幹事会メンバーだった渡久地政弘さん(81)「那覇市」は「大衆運動を盛り上げるため、沖縄闘争の再構築が必要だ。行進をしよう」と提起した。玉城さんの思いも同じだった。「復帰闘争の原点、平和運動を再構築しないといけない」。平和行進の開催が決まった。

78年5月13日、名護市を起点に平和行進がスタートした。東西2コースのうち、玉城さんは西の団長を担った。最初の一步を踏み出したのは約150人。治道の応接が復帰前のように後押しした回数を重ね参加者は増え、近年では県内外を含め約5000人規模の開催に成長した。名護市辺野古における新基地建設の強行など、沖縄に対する不条理を共有する場になった。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、平和行進はことし初めて中止した。玉城さんは「今こそ、若い人たちの感覚で新しい運動方法をひらめく時だ」と強調した。渡久地さんも「平和行進をどうするか考える時間ができたと思えばいい。どんなに困難でも運動を続ければ展開が開ける」と見据える。立ち止まった歩み。けん引者たちは運動の在り方を耳詰り直し、その再々構築を期待した。

(中村良太)

◇ ◇ ◇ ◇  
昨年、42回を数えた5・15平和行進。復帰とは何だったのか。立ち止まったことで見えてきた人々の思いを次の歩みへつなぐ。



1978年に始まった平和行進の意義について語る①玉城幸輝さん ②渡久地政弘さん(那覇市)



# 歩みつなぐ

5・15平和行進

▷2

## 人間の鎖

家族連れや友人、同僚、見知らぬ人同士が手を握り合った。地形が険しく、人手が足りない箇所はタオルや横断幕でつなげた。「基地はいらない」。人間の鎖の参加者が声を上げ、空に手を掲げた。5・15の平和行進の42年の歩みの中で、たびたび実施された人間の鎖には、万単位の人々が参加した。沖縄に居座り続ける米軍普天間飛行場や嘉手納基地を取り囲み、民意を示した。1987年6月21日には復



嘉手納基地包囲行動などを振り返る  
仲宗根義一さん(12日、那覇市内)

## 手取り合い基地包囲

帰15年の節目に合わせ、初めて嘉手納基地包囲行動が実施された。米兵による少女乱暴事件で、県民の反基地感情が大きく膨らんだ95年や98年には「5・15」に合わせ、普天間飛行場を包囲した。

2000年7月21日、九州・沖縄サミットの首脳会合が沖縄で開催された。県民の反

## 数万人で民意示す

基地感情を和らげるための「政治判断」があったという



基地撤去などを訴え行進する参加者ら(2014年5月18日、宜野湾市の野鷹ゲート前)

声もある中、嘉手納包囲は首脳会合の前日に実施された。提起した一人、沖縄平和運動センター現事務局長の岸本喬さん(58)は「大規模な行動で、重い基地負担を国際世論に訴えたかった」と振り返った。少女乱暴事件後、日米間では普天間飛行場の返還・移設問題が主要な議論となり、

2000年の人間の鎖では2万7千人が嘉手納基地周辺を取り囲んだ。07年の5・15平和行進でも1万人が嘉手納を包囲した。

「復帰半世紀も目前だ。基地を減らさなければならぬのに、新たに造られようとしている」。仲宗根さんは変わらぬ沖縄の現状を憂う一方、あらがいつける。現在も平和行進に参加し、辺野古のゲート前でも座り込み抗議する。「那覇市の新都心などのように基地がなくなれば県民生活や経済活動の空間が生まれ、豊かになる。そのことをイメージしながら、多くの生活者が参加できるような平和運動が広がるといい」(島袋良太)

極東最大の空軍基地である嘉手納基地を「タブー視」させないために包囲することになった。

当時、沖縄平和運動センター初代事務局長だった仲宗根義一さん(78)も準備に追われた。復帰前の68年1月に嘉手納基地で起きたB52戦略爆撃機墜落も目の当たりにした。B52撤去を強く求めてきたが、沖縄の空は危険なままだ。事故が続く、嘉手納への「運

# 歩みつなぐ

5・15平和行進

▷3

## 元全駐労組合員

5・15平和行進や人間の鎖などを通じ、「反基地・平和」を発信してきた沖縄平和運動センターの歩みは幾度の転換点に直面した。その一つが、米軍基地従業員が加盟する全駐留軍労働組合沖縄地区本部（全駐労地本）の脱退だった。「基地があることで起こる事件事故への怒りと、基地撤去で職を失うことへの自問。基地従業員には常に葛藤があった」。元全駐労マリニ支部副委員長の水島満久さん(72)沖縄市IIが振り返った。

1970年代、復帰運動の中核を担ったのは、全駐労地



「95年の少女乱暴事件で平和運動は変わった」と振り返る元全駐労マリニ支部副委員長の水島満久さん(72)沖縄市

## 友の遺志継ぎ声上げ

本の前身、全沖縄軍労働組合（全軍労）だった。米海兵隊の奥道104号越え実弾砲撃演習の阻止を目的にした喜瀬武原闘争では、水島さんを含む組合員たちが抗議活動の最前線に立った。しかし、基地の固定化とともに運動は徐々に下火に。97年から「基地撤去」が運動方針から消え、2008年にはセンターから脱退した。

「平和運動の形態が変わった」。水島さんがそう実感したのは、米兵による少女乱暴

## 基地のない沖縄を

事件に抗議した県民総決起大会だった。95年10月21日、参加者8万5千人が拳を振り上げた。

「その大会以前まで、平和運動で見るごとの少なかった



亡くなった仲田憲和さんをして、死んで作られた写真集に掲載された仲田さんの肖像



「仲間を思い出す」と「まちなとまじゅんたい」の旗を手に語る下地勝博さん(73)那覇市

（組織動員されていない）人々が声を上げた。乱暴事件を契機に平和を求めるうねりが県民全体に広まった。

組織としての参加はなくなつたが、水島さんは今も官野湾市などで開催される5・15平和行進の集いに足を運ぶ。会場で平和を求める声を上げながら、思い出すのは「き友、仲田憲和さんだ。日本復帰に伴う基地従業員の大量解雇に抗議するため結成した「全軍労牧港支部青年部」の仲間で、

76年に31歳で急逝した。「リーダーシップがあつて、僕ら若い組合員を引っ張ってくれた」。水島さんが回想した。仲田さんは反基地を掲げ、米軍との交渉の先頭に立った。その遺志を継ごうと、十数人の仲間が定期的に今も集まる「まちなとまじゅんたい」を作った。

「基地を撤去しないと沖縄の将来は真つ暗だ」。仲田さんが口癖のようにこつこつ話していたことを会のメンバー、下地勝博さん(73)那覇市IIは今も覚えている。70年の大量解雇後、民間企業に転じた下地さんは平和運動に個人で参加を続ける。辺野古新基地建設の反対運動にも参加し、声を上げている。

「これを見ると憲和を思い出す」。下地さんはそう言つて黄色の旗を取り出した。会のシンボルに、と水島さんが制作した。

下地さんは「憲和の言葉のように基地がある限り、沖縄は戦争を引きずり続ける。声を上げるのを止めてはいけな

い」と前を見据えた。  
(安里洋輔)

# 歩みつなぐ

## 5・15平和行進

▷4

### 継承

昨年5月に宜野湾市で開かれた復帰47年県民大会。米軍普天間飛行場の移設に伴う新基地建设が進む名護市辺野古から當山佐代子さん(75)は娘2人、孫4人を連れて親子3世代で駆け付けた。生まれ育った恩納村から辺野古に嫁ぎ穏やかな日々を送



「子や孫が平和に暮らせるように基地反対の声を上げ続ける」と語る當山佐代子さん(左から3人目) 2019年5月19日、宜野湾市の宜野湾海浜公園

## 過重基地負担に抗議

壇上で思いを語る藤本泰成さん 2019年5月19日、宜野湾海浜公園屋外劇場



つていたが、米兵による少女乱暴事件の翌年1996年に普天間飛行場の移設先に辺野古が浮上。以降、復帰後も変わらぬ沖縄の過重な基地負担

## 平和の尊さ次代へ

に抗議の声を上げ続けてきた。今年も迎えた「5・15」の季節は、新型コロナウイルス流行で学校が休校になる中、人混みがない海辺に孫たちを連れて行くことも。「美しい海はうちの宝だ。これを埋めて戦争のための基地が造られるなんてとんでもない」と語気を強めた。昨年の親子3代での参加を機に、長女の新垣和子さん(43)、三女の

新里幸子さん(41)の基地問題

に関する考えをじっくり聞けたこともうれしかった。幼少の孫たちはまだ平和行進の意味を深くは理解していない。だが當山さんは「なぜこれだけの人が集まっているのかと疑問を持つだけでいい。大事なことは、それで伝わっていく」と話す。

藤本泰成さん(64) 神奈川県横須賀市 高校教員をしていた時、「沖縄」に出会った。「教員の組合で日本国憲

法について勉強していく中で過重な基地負担を強いられる沖縄の現状を知った」 1996年、高校の修学旅行で引率教員として初めて沖縄を訪れた。生徒と共にガマに入り、元ひめゆり学徒の証言を聞いた。各地に残る米軍基地の存在により、戦争と無縁でいられない沖縄の現実を肌で感じた。「沖縄に行き、自宅近くにある米軍横須賀基地のこともより強く意識するようになった」と話す。

2007年から沖縄平和運動センターも加盟する市民団体「平和フォーラム」に参加し、「5・15」の平和行進の列に加わるようになった。16年からは同団体の共同代表に就任。例年、平和行進に合わせ開かれる県民大会では壇上で平和への思いを語る。

「命の尊厳を守るのが平和の原点。沖縄で学んだのもそのことだ」。教員引退後は直接子どもたちに語る機会がなくなっていたが、「5・15」で後進の教員たちと交流し、平和運動の意義や運動にかける思いを語り続けている。「私から教員、そして子どもたちへ。私に与えられたのは平和の尊さを次世代に伝える触媒のような役目だと思っている」

今年も迎えた「5・15」の季節は、新型コロナウイルス流行で学校が休校になる中、人混みがない海辺に孫たちを連れて行くことも。「美しい海はうちの宝だ。これを埋めて戦争のための基地が造られるなんてとんでもない」と語気を強めた。昨年の親子3代での参加を機に、長女の新垣和子さん(43)、三女の

(おわり)

# 社説

## コロナ禍の復帰48年

沖縄の施政権返還からきょう15日で48年を迎えた。

新型コロナウイルスの影響で、1978年に始まった「5・15平和行進」と県民大会が初めて中止となった。

米軍統治下の沖縄は「空にB52、海に原潜、陸に毒ガス」天が下に隠れ家もなし」といわれたが、基地の集中が暮らしを脅かしている現状は変わっていない。

米軍普天間飛行場に近接する普天間第二小の校庭にはシエルターがある。オスプレイなど軍用機が飛来すると子どもたちが逃げ込むためだ。命が危険にさらされながら学習

する小学校がいったいどこにあるだろうか。教育を受ける権利が侵害されているのである。復帰48年の現実だ。

基地からの環境汚染は住民の健康に関わる。今年4月、普天間飛行場から発がん性が指摘される有機フッ素化合物PFOS（ピーホス）を含む

## 新基地の財源困窮者に

泡消火剤が大量に漏れ出した。泡消火剤は側溝を通って近くのことも園に飛散、川を通って住宅街に舞い散った。看過できないのは事故の原因をつくった米軍の兵士らが回収作業をせずに立ち去ったことだ。住民への被害をどう考えているのだろうか。宜野

湾市消防本部の職員が危険を冒しながら回収に当たった。

県の立ち入りが認められたのは11日後。その後の立ち入りで汚染土壌の採取を米軍が拒否し、はぎ取った土壌を米軍が県に提供した。透明性を欠き、調査とは呼べない。昨年12月の漏出事故で米軍は

「基地外へ流れていない」とうその説明をしていた。傍若無人な米軍の振る舞いを許してきた国の責任は重いと云わざるを得ない。

地元の理解が得られない安保政策は本来あり得ない。政府は、地上配備型迎撃シ

ステム「イージス・アショア」を陸上自衛隊新屋演習場（秋田市）へ配備する計画を断念した。さまざまな調査や住民説明会での職員の居眠りなど住民の強い反発を招いたからだ。昨年夏の参院選秋田選挙区では反対派の野党系候補が当選。秋田県知事も住宅地や

学校が近いとして配備断念を防衛省に要求していた。

沖縄ではどうか。県知事選や国政選挙で繰り返し、辺野古新基地建設に反対する候補が勝利を収め、昨年2月には県民投票で投票総数の約7割が反対票を投じた。民意は明らかである。だが当時の防衛相は「沖縄には沖縄の民主主義があり、しかし国には国の

民主主義がある」と言ってはばからなかった。

新基地で普天間の「二日も早い危険性除去」という政府の論理は破綻している。大浦湾に軟弱地盤が広がり、工期と工費が大幅に膨らむことを政府が認めているからだ。

新型コロナウイルスの影響で沖縄の経済はかつてない落ち込みだ。倒産の危機が迫る業者も、雇用情勢の悪化が懸念され、非正規社員やシングルマザーなどひとり親世帯は困窮を極める。国や県、市町村も対策を打っているが、不十分だ。新基地は「不要不急」の極みである。計画を断念し、その財源を窮地に陥っている中小零細企業や困窮世帯に振り向けるべきである。

日本復帰48年

社説

48年前のきょう、沖縄は日本に復帰した。

米統治下の27年の間に戦後復興から取り残された経済の遅れを取り戻そうと、これまで5次にわたる沖縄振興計画の下で社会資本の整備や産業振興策が実施され、生活水準は向上してきた。

当初は本土との格差是正が目標だったが、近年は国内屈指の成長力で、アジアへの懸け橋として日本経済のけん引役を目指すまでになった。

一方で、県民生活を圧迫する米軍基地の存在は、復帰から48年を経ても何も変わっていない。

国土面積の0.6%の沖縄に、全国の米軍専用施設面積

の70%が集中する。米軍機の墜落や部品落下がたびたび起きている。普天間飛行場から大量の泡消火剤が流出した事故のように、基地から派生する環境汚染も深刻だ。

過重な基地負担は減らないばかりか、中国をにらんだ前

古島や八重山諸島への部隊配備を押し進めている。

県民は復帰に際し、米支配からの脱却と、沖縄戦の悲劇を一度と繰り返さない平和の到来を何より願った。だが、

沖縄の民意より日米安保の安定を優先する政治が続ぎ、沖

ナ対策に取り組んでいるさなかである。国と県の関係は正常な在り方とは程遠い。

政府の強権的な姿勢は、日本社会にはびこる「沖縄ヘイト」を助長している。ここ

まで差別的な扱いを受け続けると、帰ることを切望した「祖

り強い運動がついに超大国の米国をも動かし、沖縄の施政権を日本に返還させるという道を切り開いた。

復帰当日の式典で屋良朝苗知事は「復帰とは、沖縄県民にとつて自らの運命を開拓し、歴史を創造する世紀の大

事業でもありません」と述べた。復帰の内実は県民の要求とかげ離れた不十分なものであったが、理不尽な現実を変えていく努力をあきらめてはいけ

基地なき沖縄へ歩み続く

線基地として沖縄を要塞化する危険な動きが進む。

名護市辺野古への新基地建設だけではない。伊江島補助飛行場内では機能強化を目的

に滑走路と離着陸帯の改修が進められている。自衛隊は防

衛力の南西シフトとして、宮

縄の自治は踏みにじられる。象徴的なのは、新型コロナウイルス

ウィルスの感染防止対策で県が独自の緊急事態を宣言した

翌日に、安倍政権が辺野古新基地建設を巡る設計変更を抜

き打ち的に県に申請したことだ。全都道府県が懸命にコロ

国」とは何だったのかという失望感にとらわれる。

それでも、48年前に県民が成し遂げた歴史的な意義を見

失うわけにはいかない。

米軍優先の圧政にあらがい、人権と民主主義の適用を求めて声を上げた。沖縄の粘

沖縄の進路を決めるのは県民自身だ。基地のない平和な島という理想の実現に向けて、自立と平和を求める歩みは今も続いていることを確認

したい。

# 「米軍優先 変わらず」

## 5・15行進中止 主催者アピール

5・15平和行進を主催する沖縄平和運動センター（山城博治議長）は15日、平和行進の中止を受け、平和アピールを発表した。巨

大な米軍基地が横たわり、復帰前の米軍支配下と変わらず、陸も海も空も米軍優先がまかり通っている」と過重な基地負担を背負わさ

れている沖縄の現状を示し「沖縄にはいまだ憲法など存在しない」と疑問視した。アピール文では「復帰48年目の沖縄は安倍政権による暴政のひとつ、民意無視の辺野古新基地建設が強行されている」とし、復帰時の県民の願いだった基地の「即時・無条件・全面返還

が受け入れられていないと指摘した。平和行進は復帰後世代が運営を担うようになつているとして「新たな県民運動の展開も期待される」とした。ことしの5・15平和行進は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、初めて中止となった。

## 復帰 48 年 5・15 平和アピール

新型コロナウイルス感染症と向き合い、その拡大防止のため生活を犠牲にしながたたかっている県民の皆さん、全国の皆さん、そして平和を愛するすべての世界の人々に敬意を表します。

今日は 43 回目の平和行進のスタートを予定していましたが、私たちも新型コロナウイルス感染拡大防止のため、県民や参加者のいのちを優先し、先達が築いてきた平和行進を中止いたしました。同時に 5・15 平和とくらしを守る県民大会も中止をいたしました。県民大会の平和アピールにかえて、復帰 48 年目の 5・15 平和アピールを発信いたします。

復帰 48 年目の沖縄は、安倍政権による暴政のひとつ、民意無視の辺野古新基地建設が強行されています。戦後 75 年を経た今日なお、巨大な米軍基地が横たわり、復帰前の米軍支配下と変わらず、陸も海も空も米軍優先がまかり通っています。昼夜問わず耐えがたい爆音が轟き、事件や事故は後を絶ちません。2004 年の沖縄国際大学への米軍ヘリ墜落事故が如実に示したとおり、沖縄にはいまだ憲法など存在しない、行政も立法も司法も、その全権は米軍にあるとでも言わんばかりの米軍の横暴がまかり通り、米軍支配が現在も続いていること、そして日本政府が無力なことをあらためて表しました。

安倍首相は、「日本を取り戻す」とのキャッチコピーとは裏腹に、武器の爆買いにも象徴されるとおり、歴代首相では随一の米国一辺倒です。一方で、日米安保について歴代政権は、民主主義や人権など米国と共通の理念や価値観にたっているとしてきましたが、「米国ファースト」を掲げるトランプ政権の登場で今どうなっているのでしょうか。日米安保は本当に必要なのでしょうか。「核の傘」は必要なのでしょうか。

1972 年 5 月 15 日、沖縄は日本に復帰をしました。県民の願いであった基地の「即時・無条件・全面返還」は受け入れられず、ときの総理佐藤栄作が約束した「核抜き・本土並み」さえも反故にされたまま 5 年を迎えた 1978 年に平和行進はスタートしました。私たちは平和行進で「復帰の内実」を問うてきましたが、その内実、辺野古への新基地建設や最新兵器を使用した軍事演習、宮古島、石垣島、与那国島にいたる米軍と一体となった自衛隊及び自衛隊基地の増強と、ますます「軍事の島」の要塞化が推し進められています。一方で沖縄の内実を問うことと同時に、本土参加者と共に本土の現実も問うてきました。沖縄から安保がよく見えると表現してきましたが、今では全国で安保がよく見えます。それほど憲法は危機的な状況になっています。

私たちが復帰にめざしたものは、平和憲法下への復帰でした。そこには、基本的人権、国民主権、地方自治、なによりも軍備と戦争放棄が謳われています。今その憲法は、集団的自衛権の行使容認、安保法制、共謀罪など切り裂かれてきました。それでもまだ憲法は生きています。「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないよう」に、沖縄から為政者に守らせなければなりません。

平和センターが参加をしている広島、長崎を原点とした原水爆禁止国民会議は、かねてより北東アジアの非核化地帯構想及び非核法の制定を提唱しています。かつて核の島とも言われたこの沖縄からその運動を大きくつくっていくことを誓います。5・15 平和行進は、九州全県を歩き、そして 8 月 9 日に長崎へタスキを渡す「非核平和行進」の出発でもあります。

今日的な人類共通の敵が、新型コロナウイルスなど感染症とするならば、今人類がしなければならないことは、絶対に核軍拡ではありません。それこそグローバル化で立ち向かわなければなりません。核も戦争もない 21 世紀でなければなりません。

平和行進も昨年まで 42 回を数え、復帰後世代がその運営を担うようになっていきます。歩くことで知る沖縄があります。新たな県民運動の展開も期待されます。

復帰 48 年目に誓います。沖縄をアジアの軍事の要石から平和の要石へかえていくことを。それが県民の長年の希望であります。平和のための万国津梁の架け橋となることを。

2020 年 5 月 15 日 5・15 平和行進実行委員会／沖縄平和運動センター